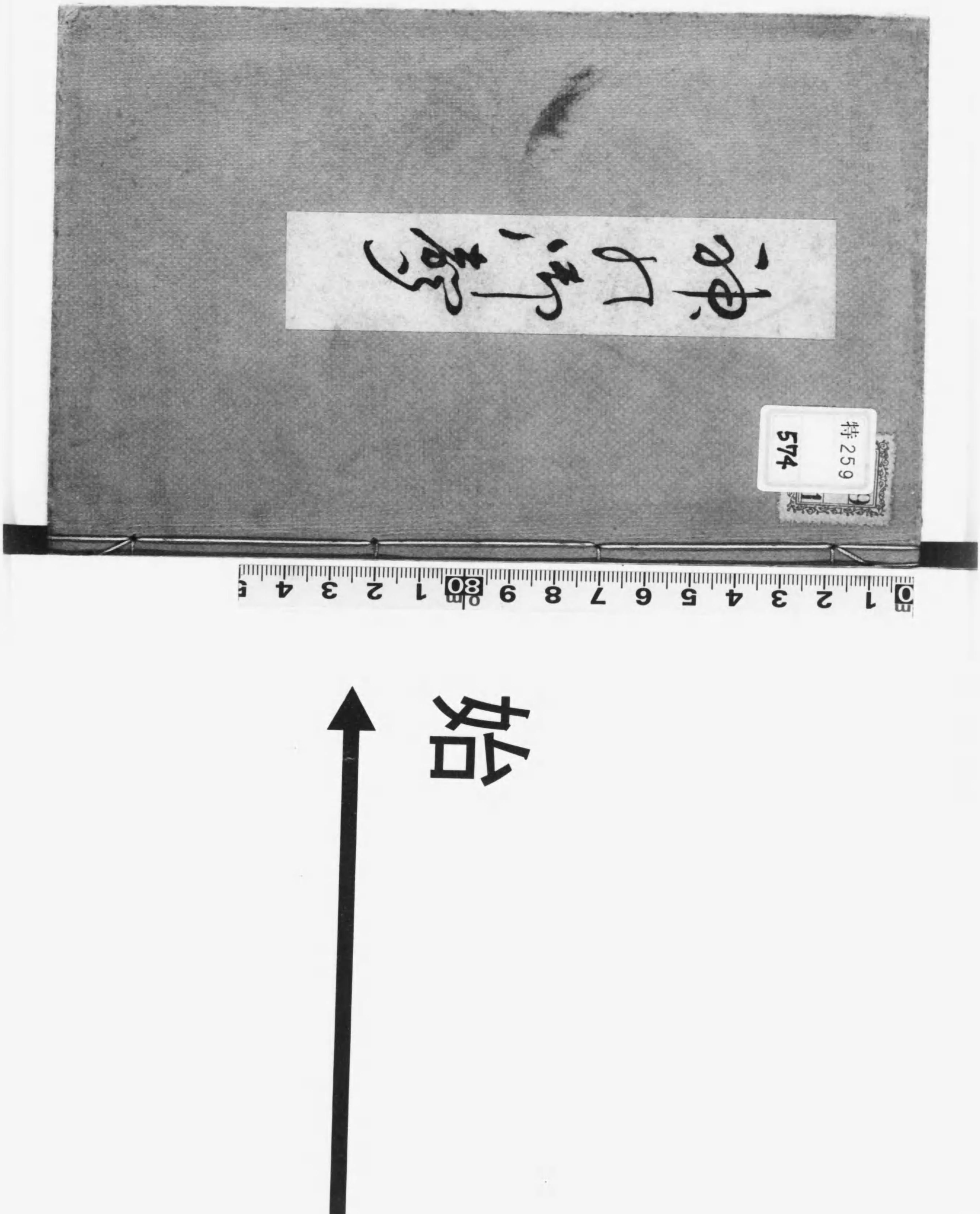

特259
574

第　回

片桐文庫賞

受賞者氏名

學校名

第　回卒業生

校長氏名

受持訓導氏名

紀元　年　月　日

昭和十五年十一月　文部省

副賞

金屬名

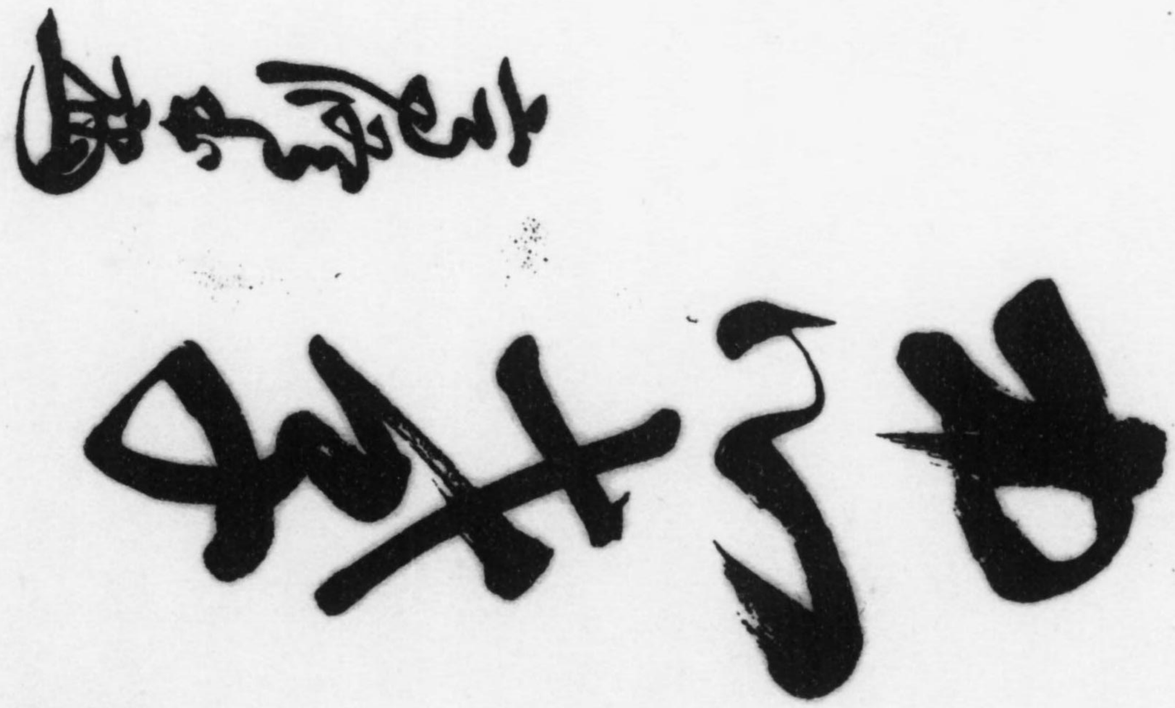
壹品

製作所　東京市　綾田景方

原型彫刻　增野桂司

圖案作製者　香川縣立高松工藝學校

教諭　鈴木彦夫



序文

片桐久助翁は三豐郡財田大野村の人。夙に軍神乃木大將の感化を受けて發憤し、丸龜市に於て乃木草履製造販賣の業を營み、勤儉産を興し寛厚人を容れ、報恩感謝の念極めて厚く、社會公共の爲に貢獻せる所亦尠からず。眞に現代立志傳中の人なり。晩年聖將東鄕元帥の染筆を懇請し　嗚呼純忠乃木將軍　と題せる豐碑をその後庭に建てゝ宿志を遂げ、朝暮兩將の高風を欽崇して其の生を終へられたるは翁が生涯に於ける畫龍の一點睛と稱すべきか。

その嗣子今の久助ぬし、先考の名を襲ぐと共に其の遺志を繼承し、茲に　皇紀二千六百年奉祝の記念として片桐文庫を創設し、尙　神の御聲　といふ一書を謹輯し、每年之を丸龜市內各小學校、並に財田大野小學校卒業生中成績優秀なる人々に寄贈せむとの企あり。今や　聖戰年を累ね來り、八紘一宇の　大詔を顯昭して、擧國一致事に當り、新東亞長期建設の爲に奮

闘しつゝある時、何人も第一に考慮せらるゝは、我が國家の將來を寄託すべき小國民の上に在り。その教育の如何に在り。片桐氏の此擧や、少年の心地に培ふに於て、洵に意義深きものと謂ひつべし。

思ふに古來私費を拋ちて佛典善書の類を出版し、之を施本とする者は、世に善行美事とも大功德とも稱讃せらるゝ所なり。況してや此の書の如く　神勅聖詔尊詠を纂輯したるものに於てをや。之を受くる少年諸君、冀くば日夜反覆拜讀して　聖訓を奉體し、　克く忠に克く孝にして、他日國家有用の材となられむ事を切望して已まざるなり。我が帝國は　上　萬世一系の聖君を戴き、下、億兆一心の臣民ありて、日本の日本は東洋の日本となり、更に世界の日本となり、今將に日本の世界とならむ域に達せり。從つて諸君の前途は大に多望なると共に、又頗る多難なりと知るべし。然れども請ふ意を强くせよ。諸君が正しきを踐んで勇往邁進する

所、必ず　神の御聲の導かせ給ふあり。惑ふ事なく懼るゝ事なく、至誠一貫自彊息まざるべし。

余曾て乃木將軍が第十一師團長たりし當時、屢その温容に接し、親しく高訓を敬承したる事あり。又先年片桐翁が乃木將軍景仰の碑を建てられし際相談に預り、加之東鄉元帥の高囑に依り、その題字の語句を撰みて淸覽に供したる緣故もあればとて、文庫主より此の書のはしがきをと需められければ、辭むに由なく、僭越ながらその刊行に至れるあらましを書きしるしつ。

皇紀二千六百年紀元節佳辰

堀澤周安

特259
574

神の国

神勅

葦原の千五百秋の瑞穗の國は、是れ吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫就して治らすべし。行矣。寶祚の隆えまさむこと、當に天壤と窮り無かるべし。

橿原奠都の令（紀元前二年）

われ東に征してより茲に六年になりぬ。皇天の威を頼りて凶徒就戮されぬ。邊土未だ清らず、餘妖尚梗しと雖、中洲の地復風塵無し。誠に宜しく皇都を恢廓め大壯を規摹るべし。而して今、運屯蒙に屬ひ、民心朴素なり。巣に棲み穴に住む、習俗惟常となれり。夫れ大人の制を立つる、義必す時に隨ふ。苟も民に利有らば何ぞ聖造に妨はむ。且た當に山林を披拂ひ宮室を經營りて、恭みて寶位に臨み、以て元元を鎮むべし。上は則ち乾靈の國を授けたまふ德に答へ、下は則ち皇孫正を養ひたまひし心を弘めむ。然して後に、六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩ひて宇と爲むこと、亦可からずや。夫の畝傍山の東南橿原の地を觀れば、蓋し國の奥區ならむ。治るべし。

御誓文（明治元年三月十四日）

一 廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ

一 上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ

一 官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ゲ人心ヲシテ倦マザラシメンコトヲ要ス

一 舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ

一 智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ

我國未曾有ノ變革ヲ爲ントシ朕躬ヲ以テ衆ニ先ンシ天地神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立ントス衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ

勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ倶ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト倶ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽

詔書

朕惟フニ方今人文日ニ就リ月ニ將ミ東西相倚リ彼此相濟シ以テ其ノ福利ヲ共ニスミルニ日進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠澤ヲ共ニセムトスル固ヨリ內國運ノ發展ニ須ツ朕ハ爰ニ益々國交ヲ修メ友義ヲ惇シ列國ト與ニ永ク其ノ慶ニ賴ラムコトヲ期ス顧戰後日尙淺ク庶政益々更張ヲ要ス宜ク上下心ヲ一ニシ忠實業ニ服シ勤儉產ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ成シ華ヲ去リ實ニ就キ荒怠相誡メ自彊息マサルヘシ

抑我カ神聖ナル祖宗ノ遺訓ト我カ光輝アル國史ノ成跡トハ炳ト日星ノ如シ寔ニ克ク恪守シ淬礪ノ誠ヲ輸サハ國運發展ノ本近ク斯ニ在リ朕ハ方今ノ世局ニ處シ我カ忠良ナル臣民ノ協翼ニ倚藉シテ維新ノ皇猷ヲ恢弘シ祖宗ノ威德ヲ對揚セムコトヲ庶幾フ爾臣民其レ克ク朕カ旨ヲ體セヨ

御名御璽

明治四十一年十月十三日

詔書

朕惟フニ國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニ在リ之ヲ涵養シ之ヲ振作シテ以テ國本ヲ固クセサルヘカラス是ヲ以テ先帝意ヲ教育ニ留メサレラレ國體ニ基キ淵源ニ遡リ皇祖皇宗ノ遺訓ヲ掲ケテ其ノ大綱ヲ昭示シタマヒ後又臣民ニ詔シテ忠實勤儉ヲ勸メ信義ノ訓ヲ申ネテ荒怠ノ誡ヲ垂レタマヘリ是レ皆道德ヲ尊重シテ國民精神ヲ涵養振作スル所以ノ洪謨ニ非サルナシ爾來趨向一定シテ教果大ニ著レ以テ國家ノ興隆ヲ致セリ朕即位以來夙夜兢々トシテ常ニ紹述ヲ思ヒシニ俄ニ災變ニ遭ヒテ憂悚交々至レリ

輓近學術益々開ケ人智日ニ進ム然レトモ浮華放縱ノ習漸ク萌シ輕佻詭激ノ風モ亦生ス今ニ及ヒテ時弊ヲ革メスムハ或ハ前緒ヲ失墜セムコトヲ恐ル況ヤ今次ノ災禍甚タ大ニシテ文化ノ紹復國力ノ振興ハ皆國民ノ精神ニ待ツヲヤ是レ實ニ上下協戮振作更張ノ時ナリ振作更張ノ道ハ他ナシ先帝ノ聖訓ニ恪遵シテ其實效ヲ擧ゲルニ

在ルノミ宜ク教育ノ淵源ヲ崇ヒテ智德ノ竝進ヲ努メ綱紀ヲ肅正シ風俗ヲ匡勵シ浮華放縱ヲ斥ケテ質實剛健ニ趨キ輕佻詭激ヲ矯メテ醇厚中正ニ歸シ人倫ヲ明ニシテ親和ヲ致シ公德ヲ守リテ秩序ヲ保チ責任ヲ重シ節制ヲ尙ヒ忠孝義勇ノ美ヲ揚ケ博愛共存ノ誼ヲ篤クシ入リテハ恭儉勤敏業ニ服シ產ヲ治メ出テテハ一己ノ利害ニ偏セスシテ力ヲ公益世務ニ竭シ以テ國家ノ興隆ト民族ノ安榮社會ノ福祉トヲ圖ルヘシ朕ハ臣民ノ協翼ニ賴リテ彌々國本ヲ固クシ以テ大業ヲ恢弘セムコトヲ冀フ爾臣民其レ之ヲ勉メヨ

御名御璽

攝政名

大正十二年十一月十日

詔書

朕惟フニ神武天皇惟神ノ大道ニ遵ヒ一系無窮ノ寶祚ヲ繼ギ萬世不易ノ丕基ヲ定メ以テ天業ヲ經綸シタマヘリ歴朝相承ケ上仁愛ノ化ヲ以テ下ニ及ボシ下忠厚ノ俗ヲ以テ上ニ奉ジ君民一體以テ朕ガ世ニ逮ビ茲ニ紀元二千六百年ヲ迎フ

今ヤ非常ノ世局ニ際シ斯ノ紀元ノ佳節ニ當ル爾臣民宜シク思ヲ神武天皇ノ創業ニ騁セ皇圖ノ宏遠ニシテ皇謨ノ雄深ナルヲ念ヒ和衷戮力益々國體ノ精華ヲ發揮シ以テ時艱ノ克服ヲ致シ以テ國威ノ昂揚ニ勗メ祖宗ノ神靈ニ對ヘンコトヲ期スヘシ

御名御璽

昭和十五年二月十一日

昭和十四年五月二十二日

青少年學徒ニ賜ハリタル勅語

國本ニ培ヒ國力ヲ養ヒ以テ國家隆昌ノ氣運ヲ永世ニ維持セムトスル任タル極メテ重ク道タル甚ダ遠シ而シテ其ノ任實ニ繫リテ汝等青少年學徒ノ雙肩ニ在リ汝等其レ氣節ヲ尚ビ廉恥ヲ重ンジ古今ノ史實ニ稽ヘ中外ノ事勢ニ鑒ミ其ノ思索ヲ精ニシ其ノ識見ヲ長ジ執ル所中ヲ失ハズ嚮フ所正ヲ謬ラズ各其ノ本分ヲ恪守シ文ヲ修メ武ヲ練リ質實剛健ノ氣風ヲ振勵シ以テ負荷ノ大任ヲ全クセムコトヲ期セヨ

明治天皇御製謹抄

述懷

（明治十一年以前）

いにしへの書見るたびに思ふ哉おのが治むる道はいかにと

社頭祈世

（明治二十四年）

とこしへに民安かれと祈るなるわが世を守れ伊勢の大神

道

（明治三十六年）

千早ぶる神の開きし道を又ひらくは人の力なりけり

水

器には從ひながらいはがねもとほすは水の力なりけり

神祇

わが心およばぬ國のはてまでも夜ひる神は守りますらむ

見花

（明治三十七年）

戰のにはに立つ身をいかにぞと思へば花も見る心地せず

庭泉

庭の面に清水の音は聞ゆれど掬ぶいとまも無き今年かな

折にふれて

暑しともいはれざりけりにえかへる水田に立てるしづを思へば

同じく

軍人いかなる野邊に明すらむ蚊の聲しげくなれる夜ごろを

行路萩

行く人を妨げざらば立どまり見てましものを野邊の秋萩

折にふれて

痛手おふ人のみとりに心せよ俄に風の寒くなりぬる

天

あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが心ともがな

道

遠くとも人の行くべき道行かば危き事はあらじとぞ思ふ

同じく

開くれば開くるまゝに思ふ哉あらぬ道にや人の入らむと

農　家

しづがすむ藁屋のさまを見てぞ思ふ雨風あらき時はいかにと

田家翁

子等は皆軍のにはにいでは丶翁やひとり山田守るらむ

藥

いかならむ藥與へて國の爲いたでおひたる人をすくはむ

歌

天地も動かすばかり言の葉のまことの道をきはめてしがな

軍　旗

ますらをに旗をさづけて祈る哉日の本の名をかゞやかすべく

劔

あらはさむ時は來にけりますらをがとぎし劔の清き光を

鏡

國といふ國の鏡となるばかり磨けますらを大和だましひ

正述心緒

よもの海皆はらからと思ふ世になど波風の立さわぐらむ

述懷

照るにつけ曇るにつけて思ふ哉わが民草の上はいかにと

同

國を思ふ道に二つはなかりけり軍のにはに立つも立たぬも

親

ひとり立つ身になりぬともおほしたてし親の恵を忘れざらなむ

民

ほど〳〵に心を盡す國民の力ぞやがてわが力なる

農夫

山田守るしづが心は安からじ種おろすより刈りあぐるまで

心

敷島のやまと心の雄々しさは事ある時ぞあらはれにける

神祇

國民はひとつ心にまもりけり遠つみをやの神のをしへを

仁

國の爲仇なす仇はくだくともいつくしむべき事な忘れそ

行

世の中の人の司となる人の身の行よたゞしからなむ

折にふれて

うつせみの世の爲進む軍には神も力をそへざらめやは

いかならむ事にあひても撓まぬはわが敷島のやまとだましひ

國の爲身をかへりみぬますらをを數多得にけりこの時にしも

家富みてあかぬ事なき身なりとも人の務に怠るなゆめ

事しげき世にはあれども國民を教ゆる道に心たゆむな

折にふれて　（明治三十八年）

新しき年のたよりに仇の城ひらきにけりと聞くぞ嬉しき

老梅

寒しとてこもるべしやは枝くちし老木の梅も花咲きにけり

夏述懷

まつりごと出でゝ聽くまはかくばかり暑き日としも思はざりしを

霜夜聞鐘

霜ふみて撞らむ人の寒ささへ思ひやらるゝ鐘のおとかな

蘆間舟

とる棹の心長くも漕ぎよせむ蘆間の小舟さはりありとも

寢覺述懷

行末はいかになるかと曉の寢覺々々に世を思ふかな

民

國の爲いよ〳〵勵め千萬の民も心をひとつにはして

折にふれて

世の中の事ある時にあひぬともおのがつとめむわざな忘れそ

さま〳〵に物思ひ來し二とせはあまたの年を經し心地する

細　徑　（明治三十九年）

小山田の畔の細道細けれどゆづりあひてぞしづは通へる

寫　眞

國の爲命を捨てしますらをの姿を常にかゝげてぞ見る

教　育

いかならむ時にあふとも人は皆誠の道をふめとをしへよ

心

世の人にまさる力はあらずとも心にはづることなからなむ

神　祇

神風の伊勢の宮居を拜みての後こそきかめ朝まつりごと

折にふれて　（明治四十年）

おのがじゝつとめを終へし後にこそ花の蔭には立つべかりけれ

道

おのが身を修むる道は學ばなむしづがなりはひ暇なくとも

朝鳥

朝まだきねくら離れてたつみれば鳥もつとめのある世なりけり

馬

人ならばほまれのしるし授けまし軍のにはに立ちし荒駒

歌

言の葉のまことの道を月花のもてあそびとは思はざらなむ

寶

神代よりうけし寶をまもりにて治め來にけり日の本つ國

子

みなし子に語り聞かせよ國の爲命すてにし親のいさを、

師

わけのぼる道のしをりとなる松は位なくてもうやまはれけり

神祇

目に見えぬ神の心に通ふこそ人の心のまことなりけれ

孝

たらちねの親につかへてまめなるが人のまことの始なりけり

行

やすくしてなし得難きは世の中の人の人たる行にして

折にふれて

暇あればまづこそ思へ戰にたゝれずなりし人はいかにと

塵　（明治四十一年）

ともすれば浮きたち易き世の人の心の塵をいかでしづめむ

述懷

千萬の民の力をあつめなばいかなる業も成らむとぞおもふ

國交

親しみのかさなるまゝに外國の人も心を隔てざりけり

師

學び得て道のはかせとなる人もをしへの親の惠忘るな

折にふれて

わが心われと折々かへりみよ知らず知らずも迷ふことあり

くろがねの的射し人もあるものを貫きとほせやまとだましひ

日　（明治四十二年）

さし昇る朝日の如くさはやかに持たまほしきは心なりけり

國

よきをとりあしきを捨てゝ外國に劣らぬ國となすよしもがな

述懷

戰のかちにほこりてむらぎもの心ゆるぶなわが軍人

教育

たゞしくも生ひしげらせよ教草をとこをみなの道を別ちて

仁

いつくしみあまねかりせば唐土の野にふす虎もなつかざらめや

義

身にあまる重荷なりとも國の爲人の爲にはいとはざらなむ

誠

鬼神も泣かするものは世の中の人の心のまことなりけり

折にふれて

天をうらみ人を咎むる事もあらじわがあやまちを思ひかへさば

玉

（明治四十三年）

實ともいふべき玉はなくならむこまかに瑕をもとめ出でなば

車

くつがへる事もこそあれ小車の進むにのみはまかせざらなむ

述懷

己が身はかへりみずしてともすれば人の上のみいふ世なりけり

工

外國に劣らぬものを造るまでたくみの業にはげめもろ人

教育

わがしれる野にも山にもしげらせよ神ながらなる道をしへ草

樂

千萬の民と共にもたのしむに增す樂はあらじとぞおもふ

折にふれて

道々につとめいそしむ國民の身をすくよかにあらせてしがな

國

（明治四十四年）

天つ神定めたまひし國なればわが國ながらたふとかりけり

披書知昔

よむ書の上に涙をおとしけり昔の御代のあとをしのびて

道

人の世のたゞしき道をひらかなむ虎のすむてふ野べのはてまで

錦　（明治四十五年）

外國の人に見すべき敷島の大和錦を織りいださなむ

折にふれて

なすことのなくて終らば世に長きよはひを保つかひなかるらむ

文庫主のことば

此の記念事業を興すに至りし所以のものは先代久助の遺旨を吾れ遂行したるに過ぎざるものなり。父生存中人たる可き人として世を終るまで勉めて忘れざる道を進みてこそあらまほしけれとの念願の發露に外ならざるなり。父の滿たされざりし意志を吾れ繼承して以て亡父が希望の一端を爰に實行し得たるを喜ぶものなり。惟ふに今や我が國は開闢以來の非常時局に直面し內外實に多事多艱なり然も聖戰後に於ける支那大陸を如何に指導し以て東亞永遠の平和を確立すべきかを思ふ時其の責務の如何に重且つ大なるかを痛感せずんばあらざるなり然して吾等の第二國民たる諸君の大なる覺悟と奮鬪とに俟つ可きもの多かるべき事を思ひて今回奉祝致す可き皇紀二千六百年の記念として人士を養ふ血肉とも云ふ可き教育に聊か寄與せん事を念願し茲に片桐文庫を設置し並びに毎歲小學校卒業に際し首席者又は特に成績優秀なるもの男女各一名に對し片桐文庫賞神の御聲及びメダルを贈呈し其の名譽を稱讃し併せて其の前途を祝福するものなり。

片桐文庫主　片桐久助

409
461

昭和十五年二月一日印刷
昭和十五年二月十一日發行

編輯人　善通寺町乃木町　堀澤周安

印刷人　大阪市西區新町通三丁目四四　岩城三郎

發行人　丸龜市地方一九八　片桐久助

弐千九百参拾参冊
記念文庫
桐

終